

乳がん検診（巡回）

動 向

県域部の受診者数が増加したのは、マンモグラフィ検診の導入で2市2町より新規に検診を受託したためである。

県域部の検診は当協会が事務局を引き受けている「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会（会長＝福田護・聖マリアンナ医科大学乳腺内分泌外科教授）」の指導により遂行されている。同連絡会は「県成人病検診管理指導協議会乳がん分科会（会長＝同上、事務局＝県福祉部高齢者保健福祉課）」の指導のもとに運営されている。

厚生労働省の指針に基づき、検診車によるマンモグラフィ併用検診実施市町村は、前年の2町から本年は8市13町村に急増した。マンモグラフィの撮影は協会の認定資格保有の女性技師により行われ、読影は上記連絡会の下にマンモグラフィ運営委員会を組織し、この指導の下で聖マリアンナ医大をはじめ県内4大学の認定資格保有の医師によるダブルチェックで読影されている。

横浜市より受託の検診は「横浜市乳がん検診協議会（会長＝土屋周二・横浜市立大学名誉教授）」の指導のもと、市衛生局ならびに各保健所と協力して検診を実施している。

横浜市のマンモグラフィ検診は、50歳以上の週数年齢者に対し市内で装置を有する医療機関で実施されており、集団検診においては、視触診による検診を行い市内のマンモグラフィ実施医療機関を紹介して、受診をってもらうシステムとなっている。

市内医療機関で撮影されたマンモグラフィの二重読影と総合判定を、総合判定機関として事務局を引き受けており、検診の精度管理向上に寄与している。

なお、昭和55年より20年間実施してきたこの集団検診は16年度で終了する。

受診者総数の県域での大幅の増加は主に再診者で、上記のマンモグラフィ検診車の需要の増加とメディアのキャンペーンが寄与していると思われるが、横浜市では微増に止まっている。横浜市の50歳以上マンモグラフィ検診は施設検診では定着したの

に反し、巡回検診では視触診検診の受診者の方がマンモグラフィ検診受診者よりまだ多いのが驚きである。宣伝不足と撮影施設への再受診の不便さのためかとも思われる。17年度より横浜市では20年間実施されて来た巡回健診が廃止され40歳以上を対象としたマンモグラフィ併用の施設検診のみとなるため検診の総受診者の減少が危惧される。やはり巡回健診は県域のようにマンモグラフィ検診車の導入がなければ大幅な増加は期待できないし、施設検診でカバーできるかどうかの問題である。検診方法が一定していない過度期なので結果分析は厳密にはできないが、検診によるがん発見数は県域では29（発見率0.14%）と前年の15（発見率も0.09）と倍増し、視触診のみ15（発見率0.13%）マンモグラフィ併用14（0.17）と受診者の増加の効果が現れているように思われる。一方横浜市のがん発見数は視触診13（発見率0.11%）、このうち視触診のみ50歳以上は6（0.11%）に比しマンモグラフィ併用は10（0.25）と効果はかなりあると言えよう。17年度より30歳以下の検診は横浜市では打ち切られるが、たまたま16年度は県域では1、横浜市では0で影響は少ないと思うが自己検査の指導や超音波検診の導入の検討が必要で検診の恩恵の欠落者を出してはならないと思う。

表3-1 視触診検診実施状況(50歳以上)

区分	受診者	要精者	精検受診者		精密検査結果										未受診	未把握		
					乳がん		乳線腫症	乳線炎	乳線腫	異常分泌	石灰化像	その他の疾患	経過観察	異常なし			追跡中	
					数	%												
	5601	174	167	96.0	6	0.11	70	6	-	1	2	9	4	2	54	13	-	7

表3-2 マンモグラフィ併用検診実施状況(50歳以上偶数歳)

区分	受診者	要精者	精検受診者		精密検査結果										未受診	未把握		
					乳がん		乳線腫症	乳線炎	乳線腫	異常分泌	石灰化像	その他の疾患	経過観察	異常なし			追跡中	
					数	%												
	3970	259	220	84.9	10	0.25	89	12	-	-	-	9	24	-	68	8	-	39

関係の集計表は91頁に掲載